



Title	感情表現としての補助動詞の考察：V- テクルを例に
Author(s)	筒井, 佐代
Citation	外国語教育のフロンティア. 2019, 2, p. 127-141
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/71886">https://doi.org/10.18910/71886</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 感情表現としての補助動詞の考察

## —V-テクルを例に—

A Study on Usages of Japanese Auxiliary Verbs to Express Emotions:  
Focusing on ‘V-tekuru’

筒井 佐代

### 要約

本稿では、日本語教育の初級段階で導入される補助動詞「V-テクル」「V-テイク」「V-テオク」「V-タル」「V-テミル」「V-テシマウ」「V-テアゲル」「V-テモラウ」「V-テクレル」が上級学習者でも適切に使用できないという問題を解決するため、補助動詞の導入において抽象的な意味・用法の説明だけでなく、それを使用する際の感情にも言及する必要があるということを指摘し、実際の会話データを用いて補助動詞V-テクルが表す感情を言語行動の観点から分析した。

日本語教育の文法解説書における補助動詞の説明は、主に1文単位での意味的な記述であり、日本語学習者にとっては抽象的で、実際の会話場面において使用するための説明としては十分でないことが多い。また、感情表現として導入されるのは、感情形容詞や感情を表す動詞であり、補助動詞は感情表現として扱われていない。しかし、V-テシマウを「残念な気持ちを表す」と説明することは一般的に行われており、学習者にとっても理解や運用が容易であることから、補助動詞を使用する状況とそれに伴う感情を説明すれば、学習者にとって理解しやすく、運用につなげることができるのではないかと考える。

本稿では、V-テクルに焦点を当て、〈不満・愚痴〉および〈自己の経験の語り〉の言語行動において、V-テクルを用いた発話がそれぞれどのような感情を表しているのかを、前後の発話も含めたやりとりから考察し、言語行動ごとのV-テクルの用法について論じた。〈不満・愚痴〉については、V-テクルが不満表明の発話で用いられることで、話者と話者以外の人物との対立する立場を表し、他者の行為の影響が話者に及んだ結果、話者が他者の行為の理不尽さに対して不満や不快感、怒りなどの否定的な感情を抱いていることを表現していた。また〈自己の経験の語り〉では、経験を語り始める発話においてV-テクルが用いられ、聞き手に対して以前話題にした話の続きを聞いてほしいという気持ちを表現していた。過去の会話の続きをとして会話をすることにより、会話参加者同士の関係性のつながりの実現（筒井 2017: 117）や聞き手との共有のベースの形成（山本 2001）、場の共有（水谷 2015）が行われることになる。

この分析を日本語教育に応用するには、V-テクルが使用される文脈を条件として提示で

きるよう一般化しなければならない。また、どこまで感情として捉えればよいかについても検討が必要である。

キーワード：補助動詞、感情表現、V-テクル、日本語教育

## 1. 問題提起

日本語教育の初級段階において、構造シラバスの教材では、動詞のテ形に付く補助動詞として「V-テクル」「V-テイク」「V-テオク」「V-テアル」「V-テミル」「V-テシマウ」「V-テアゲル」「V-テモラウ」「V-テクレル」が導入されるのが一般的である。これらの補助動詞は、例えばV-テクルは「現在までの時間的・空間的変化」、V-テオクは「準備」、V-テシマウは「残念な気持ち」を表すなど、意味・用法についての導入がなされ、それを使った会話の練習を行うことで定着を図るという方法が採られている。

しかし、これらの補助動詞は、初級の指導項目であるにもかかわらず、上級学習者であっても適切に使用することができないことも珍しくない<sup>1)</sup>。その原因の一つとして、意味・用法の解説が実際の会話における運用のためには十分でなく、学習者に補助動詞を使用する動機が理解されていないことがあるのではないかと考えられる。例えば、以下のような例文では、補助動詞があっても命題内容にほぼ違いはなく、学習者にとってなぜ補助動詞が必要なのか、また他の表現とどのように異なるのかが理解しにくい。

(1) (同僚との飲み会のあとで)

01A：このあとカラオケ行きませんか。

02B：すみません、今日はちょっとやめときます。

02B'：すみません、今日はちょっとやめます。

(2) (気になる異性のことについて話していく)

01A：そんなに好きなら、告白しちゃえ?

01A'：そんなに好きなら、告白すれば?

02B：うーん、でも自信ないなあ。

(3) (友人といっしょに勉強していく)

01A：ちょっと飲み物買ってくる。

01A'：ちょっと飲み物買いに行く。

02B：じゃ、私のも買ってきて。

02B'：じゃ、私のも買って。

これらの例では初級で学んだ用法では説明できない補助動詞の使い方がなされており、

学習者は、(1) のような状況でなぜ「やめます」は使用されず「やめときます」と言わなければならぬのか、(2) では「告白しちゃえば？」と「告白すれば？」のいずれも使用できるが、どのように異なるのか、(3) ではなぜ目的を表す01A'の方が不適切なのか、また02Bはなぜ「買って」ではいけないのかなど、様々な疑問を抱くことになる。

このように、初級で学習する補助動詞の意味・用法は、補助動詞の用法の一部に過ぎないため、学習者にとっては実際の会話で用いられる補助動詞の様々な用法のすべてを理解することは難しく、その結果誤用や非用が生じる。ただし、すべての補助動詞のすべての用法が学習者にとって理解や使用が困難であるというわけではない。例えば、V-テシマウについては、「残念な気持ちを表す」という説明と「財布を落としてしまいました」のような例文が学習者にとって理解しやすく、この意味でのV-テシマウは使用しやすいという声も聞かれる。このことから考えて、学習者に説明する際には、意味的な説明だけでなくそれを使用する際の状況とその発話に付随する感情についても説明する必要があるのでないかと考えられる。

日本語教育においては、感情表現として、感情形容詞（「嬉しい」「悲しい」「つらい」など）や感情を表す動詞（「喜ぶ」「安心する」「後悔する」など）が扱われるのが典型的であり（東樹・古川 2004、孫 2011）、補助動詞は感情表現としては扱われない。しかし、V-テシマウの「残念な気持ちを表す」という説明が学習者の理解と運用につながるのであれば、補助動詞を感情表現として指導する可能性を探ってみる価値があるのでないかと考えられる。

本稿では、日本語の会話データを用いて、補助動詞の話しことばにおける用法を言語行動における感情の観点から分析し、補助動詞の指導において感情に関する説明を組み入れることの可能性について検討する。

## 2. 日本語初級教育における補助動詞の解説と問題点

本節では、日本語の初級段階で扱われる補助動詞の意味・用法について、日本語教育の分野の主要な文法解説書である松岡（2000）の解説<sup>2)</sup>をまとめ、問題点を指摘する。

### 2.1 松岡（2000）の解説

まず、松岡（2000）に掲載されている順に、補助動詞の解説をまとめると。

〈V-テシマウ〉

V-テシマウは、時間を表す表現（テンス・完了）として扱われ、「完了」の用法で「すぐ片づけちゃうから、ちょっと待ってて」（松岡 2000：47）、および「話し手の後悔」の用法で「父の花瓶を落として割ってしまった」（松岡 2000：47）の例文が挙げられている。ま

た、「無意志動詞+てしまう」のときは後悔の意味、「～てしまおう」のときは完了の意味など、用いられる動詞や形式によって意味が変わることが説明されている。

＜V-テアル＞

V-テアルは、時間を表す表現（アスペクト）の一つで、「状態の継続」が主な意味・用法であるとされている。常に他動詞と一緒に使われて、行為をした人の存在が含意されることがテイル形と異なる点であり、「(空気をきれいにするために、) 窓が開けてあります」（松岡 2000：63）という例文が挙がっている。また、V-ラレテイルとほとんど同じ意味であるという説明もあり、「教室にはかぎが |かけられています／かけてあります|」（松岡 2000：63）という例文が挙げられている。

また、自他の対応がない動詞の場合には、「ある目的のためにある行為を行い、その効果が今も残っている」という「効果の継続」の意味・用法になるとされ、「たくさん勉強をしてあるから、今度のテストは大丈夫だろう」「パーティーのために、いろいろな料理を作っています」（いずれも松岡 2000：64）という例文で説明されている。

＜V-テオク＞

V-テオクは、V-テアルと同様時間を表す表現（アスペクト）の一つで、「ある目的のためにあらかじめある行為を行う」という意味であり、V-テアルの「効果の継続」とよく似ていると説明されている。例文は、「試験のために、たくさん勉強をしておきました」（松岡 2000：65）が挙げられている。

＜V-テミル＞

V-テミルも、時間を表す表現（アスペクト）の一つであり、うまくいくかどうか、正しいかどうかなどはわからないが、「ある行為を試みに行う」という意味であるとされ、「このケーキを少し食べてみてください」（松岡 2000：66）という例文で、「V-テミル」の部分に「おいしいかどうかはわかりませんが」といった気持ちが含まれていると説明されている。また、「一度パリに行ってみたい」（松岡 2000：63）という例文では、試みのニュアンスはあまり感じられないが、「行きたい」より控えめな表現になるとされている。

＜V-テアゲル・V-テクレル・V-テモラウ＞

授受の表現として扱われているこの三つの形式については、まず、V-テアゲルとV-テクレルをまとめた項目において、行為の受け手や「～のために」「～の代わりに」などで表される人物にとって、主語が行う行為が有益であると話し手が考える場合に使うと説明されている。例文は、「田中さんに本を貸してあげました」「林くんが、けがをした僕の代わりに走ってくれました」（いずれも松岡 2000：110）が挙げられている。

また、V-テモラウについては、「行為の受け手の側を主語にして恩恵を表す表現」であるとされ、「小林さんに本を貸してもらいました」「祖母に教えてもらった歌を歌います」（いずれも松岡 2000：112）という例文で、それぞれ「借りました」「教わった・教えられ

た」と比べて恩恵の意味が表されていると説明されている。また、V-テクレルと比べて、動作主を主語にしないためにやや丁寧な印象になるとして、「田中先生が論文の資料を貸してくださった」「田中先生に論文の資料を貸していただいた」（いずれも松岡 2000：113）という例文が挙げられている。

また、「母が私にみかんを {×送りました／○送ってくれました}」（松岡 2000：115）のように、授受表現の補助動詞は方向性を明示するために用いられると指摘されている。

#### <V-テイク・V-テクル>

V-テイクとV-テクルについては、空間的用法1：主体の移動、空間的用法2：対象の移動、時間的用法の三つの用法に分けられている。空間的用法1の例文は、「その飛行機は、西から飛んてきて、東へ消えていった」「演奏会にこの間買った服を着ていった」（いずれも松岡 2000：116）、空間的用法2は「実家からお米を（私に）送ってきた」（松岡 2000：119）、時間的用法は、「日本で学ぶ留学生の数が増えてきた。これからも増えていくだろう」（松岡 2000：120）の各例文で説明されている。

## 2.2 松岡（2000）の問題点

以上、各補助動詞の意味・用法の記述を見てきた。これらの記述において感情的な側面に関わるのは、V-テシマウでの話し手の後悔、V-テミルでの「「おいしかどうかはわかりませんが」といった気持ち」および「行きたい」より控えめな」願望の気持ち、V-テアゲル・V-テクレル・V-テモラウでの恩恵の気持ちであり、その他の記述においては特に感情的な側面への言及は見られない。それは、補助動詞はあくまでも文法形式の一種であり、意味的な記述でその主たる用法が説明できると考えられているからであろう。

そのことと関連して、松岡の問題点として指摘したいのは、例文が主に1文単位で挙げられており、会話形式の場合でもせいぜい2文程度の長さであるという点である。補助動詞の用法として感情の側面に言及しようと思えば、誰がどのような状況で誰に対して何を伝えるために発話しているかを明確にして説明する必要があるが、1文単位の例文では状況説明が不十分であり、その発話に付随する感情を想像しにくい。V-テシマウの「話し手の後悔」を表す例文として挙げられている「父の花瓶を落として割ってしまった」にしても、これが「話し手の後悔」を表しているかどうかは状況に依存するのであり、場合によっては「意図的に割ってせいせいした」気持ちを表すために用いられることもありうる。各補助動詞の用法が形式と一対一に対応しているのでない以上、状況の提示は指導上欠くことのできない重要な要素である。

さらに、松岡の例文では、「V-ておきました」「V-てあります」「V-てしましました」など、補助動詞のル形やタ形の形の例文が大半を占めるが、実際の会話においては「V-ておいてください」「V-てありましたよ」「V-ちゃおうか」など、様々な文末形式で用いられて

おり、それぞれの形式とそこに付随する感情に関わりがあると予想される。実際に使用される形式についての傾向は、指導の際に学習者に提示するべき重要な情報であるため、この点についても実際の会話例を分析して明らかにする必要がある。

### 3. 感情に関わる言語形式の先行研究

従来の日本語研究では、感情表現として主に感情形容詞や感情を表す動詞を扱ってきた(寺村 1982)。しかし、近年では、それ以外の言語形式を感情の表現として扱う研究も少なからず見られる<sup>3)</sup>。

メイナード(2001)は、日本語文法研究において話し手と相手の態度や感情を扱うことの重要性を指摘し、〈です・ます〉体と〈だ〉体のシフトと終助詞「よ」の使用・非使用が、会話における感情的な力関係や相手と自分の感情操作に関わっていることを、テレビドラマの会話の分析から論じている。京野(2014)は、対話で用いられるノダ文が、親しみや感情、熱心さを示すものであることを、日本語母語話者による印象評定から指摘している。また、成岡(2016)は、従来の指示詞の記述には、相互行為における指示詞の役割や指標する社会文化的コンテクスト情報が不足していることを指摘し、自然会話における指示詞の使用を分析して、「それ」と違って「そんなの」の使用には否定的感情や驚きが表現されること、「そんなこと」で話者の謙虚さを表すこと、「それ」「その」が話者の疑いの気持ちや否定的感情を指標することなどを指摘している。

本稿で扱う補助動詞の研究では、V-テシマウの用法として田村(2013)の「話者の否定的な感情(後悔や失望など)」「予想外の驚き・喜び」、V-テクルについては山本(2000)の「マイナス的な事態」や山西(2005)の「相手の行為を重く受け止める」「幸福感／安堵感」「憐憫の情」、授受表現については加藤(2001)でV-テモラウが恩恵を受けて嬉しいということを表す、京野・内田・吉成(2015)でV-テモラウとV-テクレルはいずれも恩恵に対する話者の感謝の気持ちを表すとされている。

このように、様々な言語形式について感情との関連で記述が行われていることを考えると、これらの研究を応用すれば、日本語教育での文型や表現の指導において、それを使用する際に伴う感情に言及した説明をすることが可能になるのではないかと考えられる。そのためには、それぞれの文型や表現に伴う感情を実際のデータの分析から明らかにし、それが使われる状況や前後のやりとりを一般化して状況設定の条件として学習者に提示できる形にすることが必要である。

野村(2003)は、感情表現をテクストにおいて捉える際には、喜怒哀楽の表現や願望表現などの典型的な表現類型だけでなく、その表現を含む話題における一つ一つの語句や文の相互の関係性に注目し、それらが構築するまとまりを特定の感情表現をなす動的な過程として観察する必要があると指摘している。また、成岡(2016)は、上述の指示詞の研究

において、相互行為における指示詞の役割や指標する社会文化的コンテキストを理解するには、発話の状況や周りのやり取りを観察する必要があると述べている。これらの指摘からも、感情表現の研究には、その表現の含まれるより幅広い文脈を考慮に入れたデータの分析が必要であると言える<sup>4)</sup>。

#### 4. 会話データに現れる補助動詞の分析

本節では、補助動詞を感情表現の一種として扱うことができるかどうかを考えるために、実際の会話<sup>5)</sup>において用いられた補助動詞について考察する。今回は、紙幅の都合上、松岡（2000）では感情的な側面に言及されていない「V-テクル」に焦点を当てて、いくつかの事例を観察する。

以下では、筒井（2017）の提示する言語行動の観点からのV-テクルの分類を用いて、感情が会話データから判断しやすいタイプの言語行動として〈不満・愚痴〉、そして感情が会話データから判別しにくいタイプの言語行動として〈自己の経験の語り〉を取り上げ、それぞれの言語行動においてどのような発話タイプにV-テクルが用いられ、どのような感情を表していると言えるのか、前後の発話のやりとりも含めた相互行為として分析し考察する。その際、いわゆる喜怒哀楽だけを感情として扱うのではなく、データから判断できる範囲で、その発話が表していると言える心の状態を記述することを試みる。

##### 4.1 〈不満・愚痴〉

まず、V-テクルの分類の中で感情と直結して説明しやすいと思われる、〈不満・愚痴〉の事例を見る。このタイプのV-テクルは、話者以外の人物の行為を表すのに用いられる。

事例（1）では、家族で次の日のお出かけについて話している。娘のF004は01行目の母F006の依頼に対して02行目で承諾しているが、姉F018の03行目「でもF004、全然参加してないじゃん。」という家族行事への不参加についての非難に対して、04～05行目で「何でそんな、そんな強制してくるの。」とV-テクルを用いて不満を言っている。

（1）〔名大data013〕（次の日に家族で出かけることについて）

01F006：じゃあ、明日F004ちゃん行くことにして。

02F004：ほお？ いいよ、いいよ。まあ。そんなに毎日さあ、休日でも行けないからさあ。

03F018：でもF004、全然参加してないじゃん。

04F004：してるじゃーん、毎日毎日の活動に。（いまいち参加）甘い？（甘い）何でそんな  
05 な、そんな強制してくるの。すごい奉仕してる。

06F018：すごくいいところなんだから行った方がいい。行かないと後悔する。

07F004：何か、ごまかしてるね。

08F018：違うもん。

ここでは「強制するの」の形でも同様の命題内容が表せるが、V-テクルを用いることによって「対抗的になされる行為」（山本2007）として述べ、家族に奉仕している自分とそれを非難する姉という対立する立場を明示することで不満を述べている。それに対して姉は妹の不満に直接反論するのではなく、06行目で「行った方がいい。行かないと後悔する。」と、妹のためを思っているかのようなアドバイスの発話を行ったため、妹は07行目で「何か、ごまかしてるね」と、強制からアドバイスへ姉の態度が変化したことの不誠実さに対して非難を行っている。ここでの妹は、姉の理不尽な非難に対して抵抗するやりとりの中で、相手への不満表明にV-テクルを用い、怒りや不満などの否定的な感情を強く表している。

次の事例（2）では、Sが中国に出張したときにインターネット環境が悪くてメールが使えなかつたという話をしている。Sは08～11行目で、「でニフティの：、あの：：：、パスワード入れろとか〔さ：、そういうことを言ってきたりもしたので：」と、V-テクルを用いて不満を述べている。

(2) [雑談] (中国に出張した時無線LANはすぐにつながったという話の後)

01S：でも今回はそのつながるところまではすぐに行ったんだけれど[も、

02A : [°ん°].

03 (0.3)

04S : nn メールを読-, 落とせなかつた.

05A: へえ [ : : : .

06S : [んだよ [ね.

07F : [なんか, >わかんないです [けどね<.

08S : [でニフティの:, あの:::, パスワード

## 09 入れろとか [さ:, ]

10F : [はいはい.]

11S：そういうことを言ってきましたので、やっぱちょっと(.) そこら辺がおかしか

12 った.

13A : ° へえ : °

14S : ((咳払い)) まあ、まあしょうがないけど、

15A: °国によって°,

16S : そ↑れ↑は↑そ↑れ↑でストレスなんだよわざわざ持つてってるのに仕事が、仕事

17 しなきゃと [思って持つてつてるのに進まないっていう。h h]

18A : [ . h h h h h h h h h h . h h h h h h h ]

ここでは、「言われた」という受身の形式を用いて迷惑を表現することも可能であるが、「言ってきた」とV-テクルを用いることによって相手の行為を「対抗的になされる行為」（山本 2007）として述べて相手と対立する立場を取り、通常は言われないはずのことを相手が言ったことが話者にとって不可解であるということについて不満を述べている。その後Sは16行目から強い口調で不満を言い、怒りを露わにしている。受身による迷惑の表現と比べると、V-テクルは話者への方向性を表すことから、話者に対して相手からの影響があったことをより明示的に示し、それに対する納得できない気持ちや怒りなどの否定的な感情を表すことにつながると考えられる。

これらの事例では、非難や愚痴の言語行動における不満表明の発話でV-テクルを用いることで、他者との対立する立場を明確にし、他者の行為の理不尽さや不可解さに対する不満や不快感、怒りなどの否定的な感情を表している。

#### 4.2 〈自己の経験の語り〉

次に、〈自己の経験の語り〉の事例を分析する。これは、話者自身の行為をV-テクルで表すタイプである。

山本（2001）は、「きのう歌舞伎を見てきました」のような前項動詞句と後項動詞が継起的関係にある「～てくる」は、聞き手と共有のベースを形成し事態の共有を図るものであると指摘し、水谷（2015）では、「こないだ、白馬に登ってきたよ」（水谷 2015：33）の「登ってきた」は、経験を今ここで相手と分かち合い共有したいという意識の表れであり、聞き手と「場」を共有する態度が感じられると述べている。筒井（2017）では、自己の経験を語る発話においてV-テクルが用いられる場合、単に相手の知らない経験を語るのではなく、過去に自分たちがこの話題で会話を行ったことを想起させ、過去の会話の続きをとして会話を行おうとしているのであると指摘している。ここでは、これらの指摘を感情との関わりで説明できないか、事例を用いて検討する。

事例（3）は、F116が中尊寺に行ったことについて話している会話であり、この話題を開始する01行目の発話「伊達政宗の中尊寺の、あのー、やつ行ってきたよ。よかったですなあ。」でV-テクルが用いられている。この発話は、「伊達政宗の中尊寺の」「やつ」という表現によって、「やつ」で指示されている事柄について聞き手（M023）との間で過去に話題になったことがあるということを示唆している。それに対してM023は、04行目「青葉城」と06行目「中尊寺金色堂」で、F116が訪れた場所の名前を先取りして提示し、F116の行き先を知っている者としてふるまうことでの話題についてF116と話したことがあるという立場を取り、その話の続きをF116の話を聞こうとしている。F116は、この経験の重要な部分を08行目で「これすごいね、これ。この中に死体が入っとるだもんね。」と唐突に語り始めているが、M023は10行目で「藤原でしょ、藤原氏のやつやね。」と、この

ことについて知識のある者としてふるまい、F116の経験を初めて聞くF128に対して協働で語ろうとしている。

(3) [名大data005] (F116が中尊寺に行ったことを話し始める)

01F116：伊達政宗の中尊寺の、あのー、やつ行ってきたよ。よかったなあ。

02F128：伊達政宗、仙台の方ですか？

03F116：そうそうそう。

04M023：青葉城。

05F116：うん、よかった。

06M023：中尊寺金色堂。

07F128：伊達政宗と言えば渡辺さん。

08F116：これすごいね、これ。この中に死体が入つとるだもんね。

09F128：え、うつ、そうなんですか。

10M023：藤原でしょ、藤原氏のやつやね。

11F116：うんうん、ほだほだ。

12M023：違ったっけ。

13F116：死体が。この下に入つとるんだよ、こん中に、こん中に。

14F128：へえー、(全部) 入ってるんだ。

15F116：入ってる。

16F128：へえー知らなかつた。

ここで、01行目の発話に「行ったよ」という形式を用いることも可能であるが、その場合「事前にその話題を話した」(筒井2017) という前提は「やつ」によって表されるのみである。事前にその話題について話し合っていたのであれば、聞き手は、「その行為を行つてどうなったのかを聞きたい」という期待を抱いている可能性があり、話者は「あの話の結末を聞いてほしい」という気持ちを持って語り始めることになる。ここではV-テクルを用いることにより、以前の会話を聞き手に想起させ、話者の聞いてほしいという気持ちを表し、その結果聞き手は積極的に話者の語りに参加することができている。

また事例(4)は、韓国に留学中のM034が、一時帰国して韓国のことについて話している会話である。M034は01行目で韓国映画についての経験を語り始めているが、この発話のしばらく前に、M030が「『GO』という日本映画を見ておもしろかった」という経験を語っており、01行目の発話は映画に関する話題の続きであると理解できる。M034は、別の話題(M030のビデオが壊れている)に少しそれていたからか、「僕ねえ、あのー結構ね」と、終助詞「ね」を2回用いて相手に聞くよう促しながら話題を仕切り直した上で「韓国

の映画見てきたんですけど、（うん）結構おもしろいですよ。」という発話で、新たに経験を語り始める。「結構韓国映画見てきた」という発話は、「あなたの話した『GO』だけではなく私にも映画の経験談がある」ということを含意し、聞き手に今から語る経験を聞いてほしいということを伝えようとしている。これに対して、M030は、「おもしろい？」と聞き返しているが、これは、『GO』の「おもしろかった」という評価と、「おもしろいですよ」という非過去形による評価の齟齬により、発せられた聞き返しだと考えられる。すなわち、M030は、M034の経験に新しく聞く価値があると認めたことを表し、語りを続けるように促している。M034は04行目で「日本語の字幕が付いてるんですよ。」と、経験の重要な部分の概要を提示してから、詳細を語っている。

(4) [名大data095] (M030が『GO』という日本映画を観たという話から少し話題がそれた後)

01M034：僕ねえ、あのー結構ね、韓国映画見てきたんですけど、（うん）結構おもし

02 ろいですよ。

03M030：おもしろい？

04M034：うん。いろいろと。日本語の字幕が付いてるんですよ。

05M030：えっ、ほんと？

06M034：DVDだけどね。

07M030：ほー。

08M034：ビデオ館っていうんですけど、（うん）なんか、何人かでビデオを見る、ビデ  
09 オっていうかDVDなんですけど、その、なんて言うのかな、個室ビデオ屋みた  
10 いな感じで、（うん）その、何人かが入って、大スクリーンで、そのDVDを見  
11 ることができるっていうところがあって、（うん）そこに何度か連れてってもら  
12 ったけど、結構おもしろいですねえ。

13M030：へーえ。

14M034：でもねなんかね、字幕がねえ、（うん）あのー韓国の人っていうのは、ほんと  
15 日本語すっごく上手な人たっくさんいるんですけど、（うん）そのDVDのその  
16 映画の字幕を付けるっていうのが、あのー仕事としてすごくこう、お金が安いみ  
17 たいんですね。

18M030：ふーん。

19M034：だから、あのーいい加減にやってるのか、そのーほんとにあんまり実力がない  
20 人が（うん）やってるのかわかんないけど、すんごいまちがってるんですよ。

21M030：ほー。

22M034：そのDVDの字幕がね。

23M030：うん。

24M034：だから、ちょっとね、込み入った話だったりすると、何だかわけわかんなくな

25 ったりするんですよ。

26M034：(<笑い>) (ふーん) なかなか。

この01行目で「韓国の映画見た」という形式を用いることも可能であるが、そうすると『GO』の話との直接的なつながりは表せない。ここでは、V-テクルを用いることによって前の話題とこれから語る話題が連続するという形をとり、相手に聞き手としての姿勢を取らせた上で、韓国映画一般に関する「おもしろい」経験を語っており、M030は聞き手としてあいづちを打つという役割を果たしている。

これらの事例では、経験を語り始める発話においてV-テクルが用いられ、過去に話題にしたことの結末や関連する事柄など語るべきことがあるので聞いてほしいという気持ちを表している。その際、語り手はその経験談の導入となるような情報提供は行う必要がなく、その経験の重要な部分をすぐに語り始める。過去の会話の続きとして会話を行うということは、「会話参加者同士の言語行動を、時間・空間を超えた関係性のつながりとして実現する」(筒井2017:117)行為であり、そのことが聞き手との共有のベースの形成(山本2001)や場の共有(水谷2015)にもつながるのだと思われる。

## 5. 補助動詞の指導に向けて

本稿では、補助動詞が会話において用いられる際にどのような感情を表すのかについて、2種類の言語行動におけるV-テクルの使用される発話に伴う感情を、実際の会話データを用いて分析した。これらの補助動詞の使用は、命題内容を伝える上では、補助動詞を使用しない場合や受身などの他の表現との差異がないように見えるが、その言語行動を遂行する上での話者と聞き手の立場を設定することにより、言語行動を効果的に実現するという機能を果たしていると考えられる。

前節の事例で見た感情は、〈不満・愚痴〉の言語行動においては不満や不快感、怒りなどの否定的な感情として明確に捉えやすいものであったが、〈自己の経験の語り〉では、過去に同じ話題で会話を行ったことを想起させ、「以前話したあなたに結末を聞いてほしい」といった、聞き手に対する願望や語ろうとする意欲など、明確な感情として名付けにくいような心の状態であった。しかし、いずれの「感情」も、他の同様の文脈の会話に共通して表されるものであれば、その文脈を補助動詞の使用される条件として一般化して提示することで、補助動詞を使用する動機が日本語学習者にとって具体的に理解しやすくなるのではないかと思われる。

今回検討した用法について日本語学習者に提示するとすれば、〈不満・愚痴〉については、不満や愚痴を言うという言語行動の中で他者との対立する立場を表し、他者が話者に

対して行った行為が理不尽であり納得できないということを言う発話において用いること、受身など他の形式と比べると不満や怒りなどの感情をより明確に表すことができるなどと説明することができる。また、〈自己の経験の語り〉については、聞き手と過去に話題にした行為を行った後で、その経験を同じ聞き手に語る際の開始の発話において用いること、それによって聞き手に過去の会話を想起させ、あなたにその経験を聞いてほしいのだという気持ちを伝えられることを説明することができる。後者の用法の場合は、過去の会話（例えば「今度韓国旅行に行く」）と、それを行った後の経験の語り（例えば「韓国旅行に行ってきた」）の二つの会話によるストーリーとして提示する必要があるだろう。

このような提案が日本語学習者に対して有効かどうかについては、実際に指導を行って検証する必要がある。また、感情をどの範囲にまで広げて捉えればいいのかという問題は、個々の補助動詞を詳細に観察しなければ確定することは難しいだろう。今後、会話データの分析方法についても検討しながら、これらの課題について明らかにしていきたい。

## 注

- 1) 筆者が担当する上級日本語学習者の学部留学生の日本語の授業において、補助動詞の誤用や非用が観察される。また、大学院で日本語・日本文化を専攻する留学生（母語が中国語、韓国語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語、クメール語、ビルマ語、キルギス語、ロシア語、ポルトガル語、オランダ語の上級日本語学習者）との個人的なコミュニケーションによると、補助動詞は使い方がよくわからないので使わない、あるいは使ってみるが自信がない、間違えて使っているなどの意見が多く聞かれた。
- 2) 本稿で指摘する論点は、松岡（2000）に限ったことではなく、他の文法解説書や日本語教材においても同様の特徴や解説の仕方が見られる。
- 3) 本稿では紙幅の都合上扱わないが、モダリティ形式や受身表現、評価表現等も、広い意味での感情表現として扱うことも可能であろう。
- 4) 日本語教育において文型の指導の際に「文脈」を重視すべきであるということについては、川口（2016）や太田（2017）などにおいて指摘されてはいる。ただし、その指摘が実際の教材に十分に反映されているとは言えない。
- 5) 本稿で扱うデータは、名大会話コーパス【名大】（国立国語研究所）、TalkBank内の電話会話コーパス CallFriend [CF] (<https://ca.talkbank.org/access/CallFriend/jpn.html>)、および筆者が収集した雑談会話の録音データ（140分）【雑談】と会話のメモ【メモ】から収集したものである。

## 参考文献

太田 陽子

2017 「「文脈化」という視点－「～である」の練習の検討を例に－」『習ったはずなのに使えない文法』くろしお出版、25-44

加藤 由紀子

- 2001 「感情表現における動詞とその周辺」『岐阜大学留学生センター紀要』2001 岐阜大学留学生センター、47-59

川口 義一

- 2016 『もう教科書は怖くない!! 日本語教師のための初級文法・文型完全「文脈化」・「個人化」アイデアブック第1巻』ココ出版、東京。

京野 千穂

- 2014 「対話における文末の非ノダ文・ノダ文が示す話者の伝達態度—日本語母語話者印象評定の量的調査から—」『社会言語科学』17(1) 社会言語科学会、114-127

京野 千穂・内田 由紀子・吉成 祐子

- 2015 「援助行動に対する話者の認知が授受補助動詞テモラウ・テクレルの使用に与える影響: 質問紙調査による分析」『社会言語科学』17(2) 社会言語科学会、56-67

孫 成志

- 2011 「初級日本語教科書における感情を表す形容詞に関する一考察」『日本語・日本文化研究』20 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻海外連携特別コース、237-249

田村 敏広

- 2013 「言語のアスペクト的性質を基盤とした話者の感情表出: 日本語の補助動詞「てしまう」と英語のGet構文を例に」『静岡大学教育研究』9、1-9

筒井 佐代

- 2017 「言語行動の中の補助動詞「V-テクル」-日本語教育における文法項目の扱いを考える-」『社会言語科学会第40回大会発表論文集』社会言語科学会、114-117

寺村 秀夫

- 1982 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版、東京。

東樹 和美・古川 敦子

- 2004 「感情表現を中心とした学習項目の提案に向けて」『群馬大学留学生センター論集』4 群馬大学留学生センター、29-42

成岡 恵子

- 2016 「相互行為からみた指示詞と社会文化的コンテクスト」『コミュニケーションのダイナミズム 自然発話データから』ひつじ書房、東京、39-62

野村 真木夫

- 2003 「現代語のテクストにおける感情表現」『日本語学』22 明治書院、36-44

松岡 弘監修

- 2000 「初級を教える人のための日本語文法ハンドブック」庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(著)スリーエーネットワーク、東京。

水谷 信子

- 2015 『感じのよい英語・感じのよい日本語-日英比較コミュニケーションの文法-』くろしお出版、東京。

マイナード 泉子・K

- 2001 「日本語文法と感情の接点—テレビドラマに会話分析を応用して—」『日本語文法』1(1) 日本語文法学会、90 - 110

山西 正子

2005 「～テクル」の表現価値』『目白大学人文学研究』2、131-141

山本 裕子

2000 「「くる」の多義構造－「くる」と「～てくる」の意味のつながり」『日本語教育』105 日本語教育学会、11-20

2001 「聞き手とベースを共有することを表す「～ていく」「～てくる」について」『日本語教育』110、52-61

2007 「〈主観性〉の指標としての「～テイク」「～テクル」」『人文学部研究論集』17 中部大学、67-81